

東方正教会の教会暦と奉神礼について

日大生産工 ○中西裕一

東方正教会の奉神礼は「奉献礼儀」、「啓蒙者の聖体礼儀」、「信者の聖体礼儀」の三部分に分けられる。ここでは、そのうちの奉献礼儀について、日本正教会の祈祷書にもとづき、おもな聖書の根拠を示し、ギリシャ正教会の祈祷書との異同に触れ、意味を明らかにするものである。奉神礼の祈祷書には、奉事規定にもとづいて註釈があるが、奉神礼を執行する司祭者の具体的な所作についての記述はない。これは、東方正教会の奉神礼の祈祷書はティピコン（奉事規定）に沿った骨格部分の記述であり、祈祷の構造の共通部分の記述がされているのみであり、奉神礼における具体的所作については、他の祈祷書との連携をとりながら、現場でその具体的内容が示され伝えられていくものであるからである。ここでは、日本正教会における奉神礼の一例を示すとともに、必要に応じてギリシャ正教会の例もとあけて考察する。

奉献礼儀では、聖堂の至聖所内の奉献台において、キリストの聖体血に変化する餅（パン）と葡萄酒の準備と、餅から小片を切り落として生神女マリアと諸聖人等、それ以外の生者、死者の記憶がおこなわれる。奉献礼儀は日々の奉神礼の構成のなかでは、キリストの公生涯以前をかたどるものであることから、一般会衆の目に触れることのない聖堂の至聖所内でおこなわれる。用いられる聖器物は、聖爵、聖盃、聖架、聖戈、聖匙、小袱2枚、大気、聖体となる餅5個と葡萄酒である。正教会では、アルトスは発酵餅を用いる。無発酵餅は、過越の祭りの前夜から使用されるが、キリストは機密の晩餐を過越の祭りの2日前の夜に行った（ヨハネによる福音書18:28, 19:31）。円形のものを用い表面にIC XC NI KA（キリストの勝利）の図印を刻す。原則として小麦粉、水、塩、パン種以外は用いない。供餅とよばれ、大きな餅1個を5つの部分に分けるか、より小さめのもの5個を用意する（「五餅」とも称する）。そのうちのうち1個を煮とし、それがキリストの体となる。完全なる形とされる円形のものを用い、キリストの人性、神性を象り2段とする。奉献礼儀は、日々の奉神礼の流れのなかでは、概ね第三時課、第六時課の祈りに並行しておこなわれるのを通例とする。聖体礼儀をおこなうにおいて、聖宝座には代案、すなわち不朽体を縫いつけた布が置かれる。これは、古来致命者の棺の上で聖体礼儀がおこなわれていたことによる。

奉献礼儀に先立ち、司祭司祭は聖務長の祝福を得たのち、聖堂のイコノスタシス中央の王門前で、「入堂式」とよばれる祈りをおこなう。徹夜祷によらない奉神礼の場合は、翌朝の早課のカノン終了から大詠頌開始前を目安におこなわれる。この場合、早課は翌朝になることから、通常は大詠頌後をめやすに入堂式をおこない、祭服を完装し第六時課の行われるころまでに奉献礼儀を終了する。また、徹夜祷が行われた場合は、翌朝の第三時課開始前に入堂式をおこない祭服を完装する。司祭は王門右脇にあるキリスト、同左脇にある生神女マリアへの祈祷文を読み、聖像に接吻し、聖体機密の至大さ（主の来臨の現場に立つこと）、崇高さに驚懼を懐くとともに自らを鼓舞しつつ、裁きを得ることなく「無血」の祭事をおこなうことを祈願する次の祈祷文を称える。

「主や、爾が聖なる住所の高きより爾の手を伸べて、我を今行はんとする爾の奉事に固め、我に、罪を得ずして爾の畏るべき宝座の前に立ちて、無血の聖事を行うを得せしめ給へ、蓋権能と光栄とは爾に世世に帰す、アミン」

のち、左右の詠隊と会衆へ躬拝し、以下の祈祷文を称えつつ、イコノスタシスの南門から至聖所へはいり、聖宝座（の前に至り、3度叩拝し、聖福音経、十字架、聖宝座に接吻する。

「我爾の家に入り、爾を畏れて爾が聖堂に伏拝せん、主や、我が敵の為に、我を爾の義に導き、我が前に爾の道を平にせよ、蓋彼等の口には眞實なく、彼等の心は悪逆、彼等の喉は開けし柩、其舌にて媚ひ詔（へつら）ふ、神や、彼等の罪を定め、彼等に其謀を以て自ら敗れしめ、彼等が不虔の甚しきに依りて之を逐ひ給へ、彼等爾に逆らへばなり、凡そ爾を頼む者は、喜びて永く樂み、爾は彼等を庇ひ護らん、爾の名を愛する者は、爾を以て自らほこらんとす、蓋主や、爾は義人に福を降し、恵を以て盾の如く之を環らし衛ねばなり。」

聖宝座を離れたのち、司祭あるいは輔祭は祈祷文を称えつつ、至聖所内で祭服の完装をおこなう。すなわち祭衣、領帯、帯、右手そして左手の順序にて套袖、股衣、祭袍、輔祭は大帯を、それぞれ所定の祈祷文を称えるごとに、順次着用する。祭服を完装したのち、次の祈祷文を称えたのち、手を盥（あら）う。盥うことによって、司祭自らがこの奉献に際して罪に穢れるこ

とのない姿を示し、そして主を讃美する資格を携えるよう祈りをささげる。

「主や、我無罪を以て我が手を盥ひ、爾の祭壇を周りにて讃揚の聲を宣べ、爾が悉くの奇蹟を伝へん、主や、我爾が居る所の室と爾が光榮の住所の處とを愛せり、我が霊を罪人と偕に、我が生命を血を流す者と偕に亡す母れ、彼等の手に悪業あり、其右の手は賄賂を充つ、唯我玷なくして行く、主や、我を救ひ、我を憐み給へ、我が足は直き道に立つ、我諸会の中に於て主を崇め讃めん。」

浄められ、主の力をたよって自らを啓発された司祭は、至聖所内北側の奉献台前へすすみ立ち、3度躬拝してから奉献礼儀を始める。

東方正教の聖体礼儀は、伝統的に儀式（象り）ではなく、主の来臨の現場に立つ、まことのできごととしてとらえられてきたのであり、奉献礼儀はそのような、主ご自身がおこなうしごとと一体となるものである。司祭入堂の祈祷文「爾が聖なる住所の高きより爾の手を伸べて、我を今行はんとする爾の奉事に固め」は、そのことを強調している点はすでに指摘した。それゆえ、正教会の司祭は、一つの宝座において、一日一回のみ、聖体礼儀を執行することができる。それは、この聖なるしごとが、キリスト自らが私たちのために、受け入れた死、そのために苦しみを受けたことと、復活の勝利、それをただ一度の事実と認めているためにほかならない。

そして、啓蒙者の聖体礼儀が開始される直前、奉献礼儀の終結部分において、輔祭による次のような誦文により「衆のためのしごと」が開始されることを確認する。ここに、奉献礼儀でおこなわれてきた、司祭の営みが何のためであったかが、あらためて明らかになる。

「主において（＝主が）事を行う時至れり、君や祝讃せよ。」

これは、まぎれもなく、聖体礼儀は宝座の前に立つ司祭司祭ではなく「主ご自身が司祭としておこなう」ところのいとなみであることを明らかにしている。すなわち、主のこゝろを成就するあかしとして、聖変化する羔と葡萄酒として、かつ主みずからのしごとにより、そのとき宝座の上にあり、「取りて食へ、是我が體、爾等の爲に擘かる者、罪の赦を得るを致す」と言われたように、弟子たちは、素直に、熱心に、その命の餅を食すと、キリストは杯をとり、葡萄酒を注ぎ、祝福し、神に感謝して「皆之を飲め、是我の新約の血、爾等及び衆くの人々の爲に流さる者、罪の赦を得るを致す」と語って弟子たちに与えた。弟子たちは、このことの真の意味を、主の十字架上の死と復活を経てからでなければ理解

することができなかった。のちになって、主が引き渡される前夜の晩餐において、聖体機密の制定がなされたことを知ることになる。

この祈りは、聖体礼儀における宝座（祭壇）がもたらす成聖の事実をあらためて明確にする。主キリストは、「ふたり、または三人が、わたしの名によって集まっている所には、わたしもその中にいるのである」と語ったとおり、主は聖体礼儀において臨在する。聖体機密においては、主自身が宝座であり、司祭であるとともに、犠牲に捧げられる存在でもあつて、祭品（餅と葡萄酒）みずからが成聖されて、天上の祭壇に移され、そこにすでに受け入れられていることが、下記の祈祷文からも明らかである。

「人を愛する我が神が、之を其聖なる天上の無形の祭壇に置き、属神の馨香にて享け、我等に報いて、神妙の恩寵と聖神の賜とを降すが爲に捧らん」

そして、聖体礼儀において聖変化のおこなわれたあとは、ひたすら聖神の賜と恩寵が私たちにもたらされる祈りの次元、つまり、捧げられた祭品によって、私たちが成聖される次元に移ることも明らかにされる。さらに、私たちが成聖される機会を得るとすれば、私たち自身が、その成聖にふさわしい存在として、準備されてきた身でなければならない。「聖なる者は聖なる人（々）に」という祈祷文はそれを示している。

聖体礼儀の場において現前するものは、まさしく犠牲の「事実」そのものであるという確信である。神の羔が犠牲に献げられるとすれば、捧げる側は「神、父」であるので、司祭は成聖のために、「神、父」への祈願することになる。これは、主キリストが人間としてあるとともに、神として成聖のちからをもっていること、それらは分離せず、キリストが「神、父」と意志を共有していたとともに、使い分けていたことも明らかとなる。

ここに起こったことがらは、いわば地上の真似事ではない。アルトスはアルトスであるとともに「キリストの体」でもあり、時を超えて犠牲にされたとともに成聖された、まさにただ一度の事実として受け認めねばならない。そのとき、アルトスは単なるアルトスではなく「神の羔」そのものとしてあり、それこそが犠牲として捧げられたものであることになる。